

## むかご

池松 孝子

小田急線沿線の鶴見川沿いをよく歩く。川沿いに近隣の人々の畑があり、果樹、野菜、花が楽しめるお気に入りのウォーキングコースだ。ある秋の日、ふと目に入ったのがこのむかごだった。茎の高さは2m以上もあつたらう。支柱を何本も並べて立ててあり、それにびっしりと濃い緑の蔓が密集してぐるぐる巻き付いていた。茎からこんもりと葉が繁り、その葉と茎の分かれ目に黒豆を少し大きくしたような茶色のむかごがついていたのだ。ころころとしたものがあちこちに見えた。

ほろほろとむかご落ちけり秋の雨

一茶

むかごは、山芋の葉の付け根（葉腋ようあき）にできる肉芽のことである。熟すと零れ落ちる。それが土の中に入ると根と芽が出て新たな植物体となる。むかごは自身の体の一部だから無性生殖である。生物が自分自身だけで子孫を作り出すのだ。このように無性生殖でむかごを作り子孫を繋いでいくものには山芋の他に鬼百合がある。むかごは山芋の種の役割もしていて「幻の山菜」とも言われる。

今まで茹でたむかごや、むかごご飯は食したことはあるが、地上に、それも葉の付け根に生っているのだ。これがあのむかごかと驚いた。里芋の親芋についている小さな子芋のようなものだと思っていたから。夏には葉が茂り緑のカーテンとして楽しむことができ、初秋はこのむかごを食べることができる。さらに初冬には山芋が楽しめるのだ。

これは面白いと、翌年四月だったか、農家の友人を頼って種芋をもらって育ててみた。友人からもらった農薬か何かの丈夫なビニール袋にびっしり土を入れ、種芋を縦に挿した。連休の終るころとどんぐん蔓が伸び始めた。四隅に支柱を立てた。夏になると支柱が見えないくらい蔓が巻き付いていた。そのうち、何と花が咲いたのだ。八月末、葉の付け根のあちこちにむかごがのぞき始めた。さらに秋が深まると、ぐうんと成長し、褐色になってきた。葉が紅葉し、落葉して支柱が見えるようになったら熟した証だ。